清盤
輝言 穴穂部のとね
大神

へ13
2947
37

竊暦書　巻の下

妓婦實

盛田小塩著

唐士の孫敬ハ草廬と須しく学び徐穆ハ冠の落るとも忽しく学ふぶりや作るつハ釋氏学ぶんとして終に四家と出くてる所の風俗と須しく登編堂の赤だりしともしばしばん家ふ赤郭漢者遠の秋風ける者爽と学ぶんこしく

特
へ13
2947
37

歌よ古へとなく京師よ登る。不知恩院古門前
よ新しき掘ごつり門口いろ〻の猫〻とさて
竊なる住居いの河渡せしいろ〻川のあぐれよ近き
秋風がうとび雪し男世帯れ氣さんだい鍋の風〻ざ
もべ洋燈の影れ貴とちうべ八方の燈火いろ〻
ちうたつを炊捨なれば油八水れどく小さし捨る銀
の冥加よ月夜も雪も妓婦よ打〻ゝ炬く紙ちと
ゆり大方年遂ちうしろ大三年月乃むかしさ

ちうそ藏多人年の冥ゝ秋風八奥のろよ二日酔の
むひ酒出入の按ちよ砂ちうせ月夕郷焼の鴨
の酒のついとおろうなる食遍 按 昌平坂強
酒よきつまみよきのちうれ飲つ多むひ
ざけるつちうりと湯豆腐よ鶏水といふ茶と
鴨の郷焼ちよ出入ちうて秋風 何さ上方の酒
ぶ〻ゝ持多人のよ前〻ぶ人せ也ちよ
いろくもいで後酒八七十文罪の玄川溜と鶏

どうのだうぐ和らうし書をはる
ものくいるうしまあるとしもあ酒屋書よ
ご干鱈つうくおごぎすうくひごつケ 接ケい
うくあ屋ようぶ酒屋だ中うまひ 秋風 かの書園
平ちつぎ酒でもむりまんびごもお命を
はごきまぶひしいつ地ごおまごあうよ鉄
でハもお命もはごきまひごつし小山ちぐ
もごやなつひ石といろ門ナ 接ケ 私ハせんうかう

ちんぶんやりまうと治助さんいごあごやナ 秋風
そうかり治助一ツのまま五カ 治助 肴がうあごんを
と今ちおし筆刷とし居まんく屋不ま在
面相へ十徳盤とあいく居る 秋風 ハテいくト十
徳盤ちいくうとつ迎もうごまぬせうき
ご赤ちつく毛ごひ治助イヤそあでもごうあ
せねトやうりぱちく中つく居ト表加ン酒や
おうと夢ごごうませう治助 たまごナ 酒や酒屋で

おごりまして酒酒やさんの隠くあそくなりまし
ごゝト事分家代酒やだんく お神ひぐのひまし
てござりまして そもそも今日はおりてもさりませ 治助
サアそれハ亟絶ほどなく遅も今日のあつさハテモ
今日ハ大節季でござりまして 治助 サア大節季は
何知して居るぐ何ぐ国うなるうな終エうトぐう
くいつく居ると秋風 治助 ひハナ
ぐんぐ勘定後代くいふごりひ 治助 そもじやと

中まして秋ハテそもでひ酒ぐどく酒やハイ
さやうの喧ぐ家ぐまして出て居る 治 モシ
旦那酒屋も酒屋二番季まりたりけ大晦
ごりござりまして おまくの酒よどんとあつ三門
ちやア喧ぐ事ぐ時ぐを立まして 秋風 ハテ
喧ぐして 按嬶 くけをごりひ一すのびもべひろ
しいハナ 治 そもそもやとまして 治助 ハ天窓
そもそもぐ 投首 して いつト 表の 猫ぐ ごごとり

治四年南部三戸郡ヒヤリと思ふ程涼しく
ちの高カラクト用よ入い秋風ゲ涼きあはし
城むらびしるまし幸やのつゆ〜なん雪面時
の名故年は八九二三あくそうてふぎひそん
敬愛の道具を商時源内の物と中風しき
と用ひぎ乞掃八月折前橋のまぐし加色ども
前玉簪の新八敬竜甲ーくさなぐ生絵物
二重の小袖よ金糸縫の糸弾の帯神奈川の

アまくくお婦と門口よりうくしくそくとさしたあく
中ヲにりくくおてくくござりまもう 治ハイ物
屋さんざ子ト嘉内ともく吹出治郎又人治うけ
ちひくくと思ふくくの嘉内なりあくのぶ毛八郎
義知ていて時くくあよ中くくてし合
して垂く治何ヲ又とサヤアあぐり嘉秋食之
治奥よ長さちちやりちん嘉そよりひトいてあぐく
上り嘉中ちんどト火鉢の傍よかくこまりたで

このくなかし 露 モシゆうべの物見せんかト奥よ
里 秋 何と 露 何ともさみじいてしやりよ来って
いるのもでし 秋 来りているあへびもようろうよ
露 イエ何んすりかくしなさるり 秋 何ざら来り
も来子エとの 露 急度来りびいおまへよ見せる物
が有る 秋 おりれひ子 露 中しみく猪り行急ト立
て懐くし奥よ来り 露 何じやいナ真中よ屏風
と立てまくしト按テの傍よまわり 露 おまく

そもどふど覚へのなひるのが二昨日のだん纏まで按
うしかし何で出なさらぬまでもかくしるかト 按テ
とあへをびりょうる按テたすよび吹出ひ露は否く
枕やてまいやらまじやいナ 按テ ハイワるくしトつゆ
肌とすりしりんで 露 いやそれおぬさんりひなもん
按テをふいおつしゃりトさりすりひな何がなり紙
じやとまて 露 おん又矢礼な場出しいエつゆめん
らしひよくなるひト自分立て屏風と明ケ

て秋さんのいぢらるちやうとてお
く秋何さかくもるじや祝工ゞ太坂子と何うむつ
うしひろ食ごうくいさのさ嬉いやいナ何
のお坂さんと何いふものでいナ按テイエくそれ
でも今おくしひの味わさくしゞ大形の按裏
ゝ出さ幸とゝ及んといひまこれさじやあう
嬉きいや按テうん今ちつやんざう秋いう
とくおもゞ出くいて秋すおゝ外だもゞ

出ていくおくまといわしやおまくこいてる
のじやうひお梅ちもじぐも所のぐんぬけうう
かゝ出さい私じやうの嬉おまくう出てゞ何さ
幸と推ゞ何とゝふものでいる按今のほゞうん
きして赤ゝてう嬉ちきくきゞもう赤くの
さんきとるものでひる秋りりくこアやたん
乃んさこしうけさ太坂子すしめく按さ母う
じやおちと立ふひな秋すゞ立ふんおうで

ハ秋エゥ按イヤモウそもやの時でもどのやうなやつぢでも面白ようけるぢや　高　ナ　なさけなき秋

さんようでもさて女中ハ親義でのうナ　按　なぜか

高なぜてト女房ガ新とうんとうちゆと新と祖

とのうく第ル按うかやたうおしうけうんうん

どうぜぬガ私ガ二度うんざ女命ハ一生婚やうと思ハ

げか高ナいやのでんる秋のなどゴリ高ナそうん

どんく秋何ナ也高ハとうまざ高ナおうち

おぼ按のてもうくうんさすじやてうそでうそもうれ

ぬうう一いきハモウ見ガあつうう婚ハ屋との歩

くうひてこぎりナまう秋うそで居ガ女房リ按

ハシト表ガうちうう高ハイ者やでぐり函

も泊般毎度ごまの毒ぢうト眞りう秋晩ぢく

者やさもうなう面白ナまうト出て行泊ハ

ざくあて泊見ハこあつうものやト又表ガうト

高生間ハイ初源でぐりナまく秋晩ぢく生間

ハイ〳〵ト出て行秋さん行くさのうらへハモウ
出来さうな秋むしらへとなかめたハえ
日しやなんなな秋たしろうんるゆしやアア
そもでなやうやのうらへ丸事じやるな秋何
やうやうとうらへるハもさアア組立如
おぞうまうとうとかてアア何。三重よ何やうや
たんとのせることのうへ皆りかのうちまちやん
としてをりのじやあんな秋そうやア女房

の役ざおまて安せびしもしてをがいひハイ
くト膳を立て来る按モミヲ酒ハごもでござり
ませんハいやいナ出いそがしいなる酒ホうんなト酒
女房の勇ごりふくいふ秋ちうまるれていて
らおふろうがふ云いまふ何のミアだんじゃい
ろんな芸治助さんおむしがなるへ治こ来へ
きのふれが治のうくなつてうちうち稼ヱト立て者
戸棚より行の段ま色てくし味噌とえ出へ治芸

でいひろく　寄　すくなたつてさもどけうな　沾
おめへ　何よ　ちかさる　寄　おでそうよのむしをとる
ておくのどやうふる　沾　ハア　上方の　雑煮　ハ　味噌で
する　を　寄　そもどやうふる　沾　ハテナア　江戸やア
粉油　のもなし　雑煮　さ　寄　すんるものどやナア
トいひおぐ　立　く　寄　おむしるものいどこを
ちト　奥　う　秋　そもいたつておしび　所の　系統　詩
やう　矢　背　のかアれ　ふよ　ひ　さと　思ふ　寄

ちんとふる　秋　ハテ　ちつぬうおそへて　中るのさ　寄
いうふおせちきんトひふおぐうそうちのちり
どちちりこざとをて　来　く　寄　沾助さんを
ア　よ　ひる　ひ　ひ　ぐ　ぐ　ひ　ひ　ひ　ひ　ひ　ひ　ひ　沾　かし
ちちハて　大　そう　大きな　寄　ちのうけ　寄　沾
なし　沾　ひりやアきの　小　便　れ　ぐ　持　てきこ　ぐ　ど　ど
てちれたうちよりうち　寄　中　ちんきひる　ハ　ひ　ち
おどうよの　中　へ　入　ちる　のどやうふる　沾　そうけ

いつかう何ともしてなりひとあるとまり待く
陳腐と入ゴロ〳〵と持うり高きんきいろを
いどんくどもなくぬ沿持ませうう高イエ
だんじあんと入 按 イヤト杜持ませうと出く来
王掛緒と持高こりやおえ邪さん 按 見つく
何とうりませうう高イエだんじあんと入
きえんどちく体もト表ゴロり女ハイ表や
でごりまん沿表屋と二朝高やの表

トノ十

屋うま女さやでごりまん秋表やもだんだ
女ハイくお教やまんト出う沿モウんいい
な 按 私いちてうんげ高何ごんな 按 とうく
女いおうちあげるものや高もぐもこちや
モウ見てんうちひうもせんもの 按 まや
つくえんごうあさもモウ遠分ようなりまん
ご高きえんどゴヤ〳〵モウんいうなんな
按 サアモウようなる時分どやて高ろと教こち

あれく
大変な事
なるぞ

だんへつかさんを接サアよまぶるしいつでも
そうどやて高ちよりまち一反ふくろ紙
と出して指揮のふちと撰ム接つめぐふ是もお新
ようまいト味噌の付ようとぎと出し高ち
ようまちへトのべ紙二三枚まくすりとぎの
掘と掘りく物ムくうり不斗大根と新之
合し高ちなほうト多ひ出しト又書と明
て鏡のおしぐちとして者やまと彼五

の図の左り矢さけびの者ちんどうして手
チツシツツシツくトツツシツシツトおし解き
ぐんみくくひなぐト中戸口へ上る大根是い
一ちの蕪ひろきぐんぐやな者サアあふし
ぐんきづらや鍋ぐられぬどやそぐ一てう
入くう鍋とよ丈よして拂ひといちやはくあり
ぐはるし。又修羅道の図の左りとおくいちや
もやくやなくぬどやりし大根是いお得之

さてさてくとをしき矣礼なかいさうどやな 者 何の
内方の掃ひよいちやうやうかくよんものうナ アヤ
嘉兵さん 治 イヤくめつてこまつたいとを稲工
者 あのぞうこんよ物と思ひたいようホ。そりやあい
りんとを又帝八さん 引 秋 一を何とそこへ今一ツ入い
どやのぞ 者 そりやあのうこひる 秋 ドレくト眞ようり
猪口とてしと持くて出 秋 ちゑ 大丈夫 ちゑ とこへお
ぜりとト大抵 ちゑ 得ちくれ 大丈夫 と 拵 ちゑ

者 さやうあるあるおどぎかしよ 秋 ぬるくい 稲工 ちゑ
つくして 世 後 ト 大丈夫 持へてしとうけ 秋 時
よいうあしくいりくさうぞ 者 いい相州又帝 正宗
ぞ 者 名 飛 ちな 秋 イヤきてもとものぞ 潮 これ 一
程さ 者 何どや 鴨 の 鄙 焼 しんてびいいの
どやこりやのあるナ 秋 ぞもちりりとト一口 呑
で 秋 こりるこくこくひどやト 猪口 と 出 ひと 一
ず 猪寶 の 拵 大丈夫 者 是 徳 蔵 さんきぞん

和して盃さしくやらんとのまそそかどや
くそそで一さかづきことのどやコレいさ
だくのあてはこそ又ゆろうひのそそ〻そそ〻そそ
そ〻といひかづき自然砂して呑たゆる吾
いよ〻かどもよ入ることのどや者あどそそそう
しと合してくるるゆもちんどやなんろ潤
よりて敵と合して秋ハテいひいな静よのむ
がいひといひかづきそそりそんとんく秋浩

いつのろよりも亀がりうくゆるのは けさもや
が稔くまいりまくさ秋くちゆ〻くあん
ちゆアわるひ一さそんあいがいろち近ひ
アノ亀ろくかし者名ごよあゆるハ千代
がめひくそくトうりあどう花とえてさしべ
梅ろと出ひ鶴ろつぐく秋風ろ〻く秋モウ
ま嶋ろ〻孫ろく参と持くト鶴亀と
ろ〻くゆひ秋風白梅と桂と芳のよおき

二重切の重箱をとりくるまうけさせ給ふる者
ありとて人々とりよそをとも香とも所の白梅と花
て福ゝ八重樣の八千代とさかめし男耶の
まいるハテ笑ひ世ゝやよナアト雑三
郎の家ゝ所いやいナようあざてるくナア
トいまくいる折帝妻よ痛ているとも
つけぐさりと明くなりしい氏家の部屋
四十六七もとくく紙を拡げよとぐもて筆

是儀冠者しと福王しいと新ぐまどつとくと
王寺今朝ゝも何の正法寺ものひ者貸
ハぐよ松まとぐ下ゝ口よまし口ける沿波く
ゝ名遠ひまくゝもけもぐぐ白せあら
ぐよぐ妻早くと正ゝとあ彩ひまま
ま寺見くまでしたぐたぐ正ゝまう
でぐるとくく九月ゝ帰つくとあら
中仕切ままさし又氏大嗜はもうぐ射

ひぐハ墓ふ〳〵ちゝとゆきみゝ沸めあるとでい
あんゝぜひとゝあハ美月あるまとうとをいつも
ゆどのゆうとものじやトあゞり切くいて落動
も調ゆ〳〵ぐ〳〵して寒る秋風さんぜんより
花と生あゞ〳〵雲の居これば秋花ハよく出あ
きまゝ生ん別ゞ〳〵いさあるこけ出ゆまし
ゞ〳〵ゆ出ゆ月ゆゝ〳〵ゆ表〳〵便ゞ
ゆるゝゞ〳〵ゆ動延も後ひつとりであり俗

しゝゞゞよいゆゆうゆのつくる時ゞでも孫工
よゝよゆゆ法ゞ孫工ゝゝゆゝれ通ゝゆたゆゞく
ゞゞんゆゆしゝて後〳〵の延川ゆ立服宮人
ておゞゝゆ次嗚ゆゞハいゝゆゆゝも新金政
して法ゆゝ別後しゆゆゝ加ゝゆ孫号石
てゆゝゝゆせ家ゞゞゆゞゆ遠ゆゆゝゆゝゆゆせ
ゝ嗚ゞ号遠ゝ亀のゞ〳〵ゞ清川ゝ
ゞゞ家と明〳〵ゝゝやゆゆ秋いゆ

豊春

うしとあるまゝに、夜ごと夜ごとに、
おもひのくまゝにまかせて、ものうらもせずに出て、
者やうに、ゆ一ざ長とさまゝ、秋風に、
吹び秋、けさかゝるうけもつ家をゞのやつ
ゞ移ゝうしわけ、ものうひとおもひて、おも
しらなりけるやうに、小ゑと、
おし大三十日の、ものうしと者、
さ酒ゞとへやゝ、ものうやまひうつ

者ものやあらぬとてしを者、なむさんつぎ
めゞやあ吹さんおまへのうろれ揺とちうう
しあ夜で垂さんとてうしと揺とんて
東三さも注ぎめゞや秋イやゝ連も者
のなひ酒ハのんゞいゝ毛ぬ二朝茶やとゆ茶
毛もまんぎゝゞやあるあゝ一をゞやゞろ者ゞよ
で極罪所へ参りまんおもも殺しませう秋
おりうひあ吹ふ極ものいうゝ極ものといゝも

秋ハアル沼とゐとお氣
よいとぬト羽織を引っかけ出ようとする沼モシ
旦那晩方ぢ大屋をぢよ殺しませう秋ハテぢよ
ちもなくあナト一去引っ込ま妻へ出て行お
既もともに出ようとする家ちよりさやや
くなと既ゆう義知して出て行沼田いたに
ふさぎ俳ようとむくいる家さよりも
く沼をさんいつふんぢやいナア

沼ぢよいよりの間うくく金ぢ来ぬうく九月廿
うう間後の大ぢびひ暇くぶくさだくけ
ぢ部つあくくよりの深よ来ぢのはても
あるよあ川くやたくよ晩ぢよくといくくし
ぢよる旦那のふ毋いつを私い宅へも居う
ふ毋持さイヤヌつまくく稼ヱもむうい夜室なし
よ沼ぢう呑くうもい沼水くきひ捨ぢよ
いくつやる時もくくぬ示へ来くいる時もおなじ

なぜそうつれハさりとハつまらぬといひさし
不斗(ふと)露(つゆ)を見てすこしさし合とかづきりやよ
やア君(く)のせうんでハあると火ぜりして居(ゐ)る
露ハさつぜんより何か志らんありげに襟(えり)よ
顔(かほ)をさし入ていたりけるが何思ひけんつと立上
里より出る治 おめへおけつりや露アイ今ちつ
と思ひ出したことがあるよつてちよつといん
で後(のち)よ来(く)るハへ治 モシ且那よあれまあつし

はやくおゆるやうおまちやれト露ハすナ
立出ける折節(をりふし)撞(つき)出し鐘(かね)の音ハ治郎が
胸(むね)に露が身よいしくひゞき 治 ありやもう鐘(かね)
言ひの露ハよい○それきゝ世じやナアト露ハ出て治
治郎ハさびしく灯(ともしび)とりしてそこへ行付(あんかうつけ)る
○武閑茶屋あやいはまよ及びもとへて鏡(け)
色矢(や)をとめるごとく来る治郎も今ハふせ
ぎもよふたゞ後(のち)くといひのがれけるゆ

初夏より四つまで郭よりうりかの事
あるれば此一件と書し
急角しく四つの法師はつくく思ふ旦
那も頃り事入うけらんまく引もちぎ
らざれば事と思ひ業と極めちまい旦那と
ちがてて問よいわぬうんと犬の頭をとん
て打と吹けし妻へ出んとする亦たまうい
うりの事体南三又うけもしまうぬ

治
妻への謀と宮まとうう定めし旦那もうもし
うらうらうつつと遠方へ出日八元日うん家内ま
でいらうまめへ何のひな正月三日八元も又
る妻へおし夏へ事くれかんうそうて
うんやへ事モウいつぬつトツイと奥へいて犬
精へをいる
○此うち立うう郷来のうけちひ追く
よせあうけりる治郎もちぐくちうん

して居るまどもはおん屋敷いろ後の
二三十も有るべひられべきうぜひぐなるひ
色とるを門をこの掛ひうけをう
く中まを四文をひ切る皆逢る白
まなりく咲るちをアくれしやと
ハ見へをもつ白ぐ咲をうを出るまぬまを又
ひをり狗をいるあるる折ふし咲るひる
秋風ぐりをるをりく

秋
治働さぐおうけをでひらふぐふ切ぬけを
治是ぐうををセト更れの性白ひうぐるて
出へ秋風一くをんく秋をりやアぐをどや家を
をうぐあ御ぐび金の更れハト治働の家ダ法
の一件とをやく秋風大ごうぐ又明白れ
まとなんぐ主後新見会く小屋をうぐけ
あぐくをくも今ハゼひなをと秋風ハ真を
来り秋つ西何をもつるあ見ぐやくをを紙

合しく秋おちやいや工もくんひナ秋どやとてふ
てこまつなまでい秋みくひつこおまへとふさげ
さしまんとおもつて市川ちやもやうよぬまんで
かく秋朝ちまたぐのむそくよあめ秋
氣とそれまくく祥つせうト史雅へはん
る折帝袁とゴトくく秋治助モうけ
たハ茅ちもくくもも秋工づぐ治さやう
リトいひつ袁よ虫治だまぐ男清草や園治

帝さ友いこあくちナ治アイこつちどやうトこを
明る男治ハ秋ガナんりまたうけちうとト
さうませト治助秋とこれさくくと夏ふ
くくこと秋風ガ茅ちよ治モし江戸かく治
秋ガめんりまくく秋ぐまし封却切トを
歩ぐ巳ハ十夏ぐくくく

他者氏所ふくロ上
是ふく茅ぐ情の貸ちうけ出し

[illegible]元旦とむかへ[illegible]
来かぐかしい人[illegible]文廓の
賣一旦の功とあ[illegible]る事夜[illegible]
暑い是が[illegible]をもたるの
[illegible]れば[illegible]
暑い[illegible]

寓話漫書　巻の下　大尾

干時文化四歳
卯二月刻成
洛南伏見下板橋二丁目
書林　亀屋伊兵衛
藏板

丙午俗便論

辛塩兎月著
哥川豊秀画

[illegible]書[illegible]丙午の変[illegible]
旦四恵十恵の説とつまびらかに考へ
後[illegible]と書集りく
全紙[illegible]巻し滅し[illegible]諸人の惑
ひと解画と変へ[illegible]

復讐奇話 完義氏逸話

盛田小益 著
哥川豊秀 画

全部三巻張品小説歌の士安日義家が邦曲よりひく波留名集と称する官酒会が一女と恨し復讐奇恨よりなる藤基保が義心助力よりひく波留名才孝三流よりもひとの教と対義と義

復讐奇譚 さゝ波の章

全六冊出来

溪斎月尤 画
多偽尤月 著

同後篇六冊

近刻

右同著
吉川 画

復讐奇話 雪松の巻

全五冊近刻

伏水高城旭輝 著
桜陽行原春泉 画